

紐、ボタンは全て切り外された。自殺予防のためである。軍律のきびしさをまざまざと見せつけられた一面である。翌日同期兵全員は連帯責任をとる為、朝食を与えられなかった。歯を食いしばって午前の勤務に耐えた。一方、馬は念入りに手入れを受けピカピカに磨き上げられて行く。物を尋ねられて答えられない時は軍隊手帖を見て答える事は許されている。人格、教養、ユーモア等一切を無視した軍隊の中で唯一ホツとするところである。しかし「知りません」は絶対に許されない。「バカ者。忘れましたと答えろ」と一喝。すぐ軍隊が顔を出す。初年兵の一期の検閲が終り、二段階の試験に合格、陸軍甲種幹部候補生（伍長、下士官の最下位の階級）として千葉県の野戦砲兵学校に転属命令が出る。陸軍将校

としての訓練を受ける為である。移動中、神戸、大阪の一面の焼野原を目にし、空襲の恐ろしさを知る。大阪駅の一分間の停車中の面会を期待したが、私の移動通知のはがきは実家に届いてなかった。移動は既に極秘裏に進められていたのである。

野戦砲兵学校でも、馬から馬への勤務は変わらない。若干異なるのは、同室者が同階級の幹部候補生だった事、夕食後砲術学習のカリキュラムが組まれていた事である。演習内容が、至近距離からの対戦車攻撃訓練に変更されて行く。その為の蛸壺（たこつぼ）状の空堀りが連日続けられて行く。真夏に入った頃から連日連夜空襲警報が鳴り響いた。その都度、馬を引いて近くの山に退避、これが何日続いたか。ある日突然日中の空襲警報である。突如として空

からの轟音（ごうおん）、敵機？味方機？続いてバリバリと炸裂音、一瞬どう対処したのか覚えはない。無我夢中であった。気がついた時は既に敵機の機銃掃射は終わっていた。営兵（守衛）一名の戦死が伝えられた。地上軍の対空攻撃も、空軍の迎撃も一切なかった。千葉の大空襲を目にした。例によって空襲警報のサインと共に馬の避難場所に移った時、ある方向が赫（あか）く燃え上った。「あの方向は千葉だ」の声がきこえて来る。敵機による焼夷弾攻撃である。執拗な焼夷弾投下が続く。夜明けまで続く空襲にも、日本軍の応戦は全く無かった。何日か後広島に、そして長崎に大型の新型爆弾の投下ニュースがどこからか伝わってきた。公式発表は一切ない。後日原子爆弾投下と知る。「こんな状態で、